

彦根市内遺跡発掘調査報告書

丁田遺跡第 6 次

福満遺跡第 19 次

須川遺跡第 7 次・第 8 次・第 10 次

令和 5 年 3 月

彦根市

彦根市埋蔵文化財調査報告書第 89 集

彦根市内遺跡発掘調査報告書

丁田遺跡第 6 次

福満遺跡第 19 次

須川遺跡第 7 次・第 8 次・第 10 次

令和 5 年 3 月

彦根市

例 言

1. 本書は、彦根市教育委員会（平成31年4月～彦根市市長直轄組織文化財課、令和2年4月～彦根市歴史まちづくり部文化財課）が、平成27年度～平成30年度に国庫補助および県費補助対象事業として実施した市内遺跡発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課（平成31年4月～彦根市市長直轄組織文化財課、令和2年4月～彦根市歴史まちづくり部文化財課）が実施した。整理調査の体制は下記のとおりである。

令和4年度（整理調査・報告書刊行）

彦根市長：和田裕行

歴史まちづくり部長：久保達彦 歴史まちづくり部次長：古川雅之

歴史まちづくり部参事兼文化財課長：井伊岳夫

課長補佐兼管理係長：西崎和則

文化財係長：林 昭男 主査：戸塚洋輔 主査：田中良輔 技師：内藤 京

技師：川村峻太

会計年度任用職員：宮崎幹也 会計年度任用職員：樋口杏奈

会計年度任用職員：沖田陽一 会計年度任用職員：久保亮二

会計年度任用職員：小野直子 会計年度任用職員：岡田ひとみ

会計年度任用職員：春名英行

3. 本書で報告した各調査の調査担当者と各章の執筆者は下記のとおりである。
本書の編集は林が行った。
第1章 丁田遺跡（第6次） 調査担当者：田中 執筆者：田中
第2章 福満遺跡（第19次） 調査担当者：田中 執筆者：田中
第3章 須川遺跡（第7次） 調査担当者：林 執筆者：林
第4章 須川遺跡（第8次） 調査担当者：林 執筆者：林
第5章 須川遺跡（第10次） 調査担当者：内藤 執筆者：内藤
4. 本書で使用した遺構実測図は、沖田陽一（当時臨時職員）、久保亮二（当時臨時職員）、田中、内藤、林が作成し、遺物実測図については、宮崎幹也（会計年度任用職員）、樋口杏奈（会計年度任用職員）が作成した。遺構・遺物の写真撮影は、各調査担当者が行った。
5. 本書で使用した方位は、平面直角座標第VI系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。
6. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市で保管している。
7. 本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。
弥生土器・土師器 須恵器

目次

例言

第1章 丁田遺跡（第6次）

| | |
|---------|---|
| 1 遺跡の概要 | 1 |
| 2 調査経過 | 3 |
| 3 調査成果 | 3 |
| 4 総括 | 5 |

第2章 福満遺跡（第19次）

| | |
|---------|----|
| 1 遺跡の概要 | 9 |
| 2 調査経過 | 11 |
| 3 調査成果 | 11 |
| 4 総括 | 13 |

第3章 須川遺跡（第7次）

| | |
|---------|----|
| 1 遺跡の概要 | 17 |
| 2 調査経過 | 17 |
| 3 調査成果 | 18 |
| 4 総括 | 22 |

第4章 須川遺跡（第8次）

| | |
|---------|----|
| 1 遺跡の概要 | 29 |
| 2 調査経過 | 29 |
| 3 調査成果 | 29 |
| 4 総括 | 32 |

第5章 須川遺跡（第10次）

| | |
|---------|----|
| 1 遺跡の概要 | 37 |
| 2 調査経過 | 37 |
| 3 調査成果 | 38 |
| 4 総括 | 38 |

報告書抄録

第1章 丁田遺跡（第6次）

1 遺跡の概要

丁田遺跡は、彦根市高宮町に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。調査地が位置する高宮町は彦根市北部、犬上川右岸の扇状地上、標高約100 m前後の地点に位置し、遺跡北西部には古墳時代の集落、古代寺院、官衙などで知られる竹ヶ鼻廃寺遺跡が所在している。

丁田遺跡では、これまでの発掘調査によって縄文時代、古墳時代、古代、中世の各時期にわたる遺構と遺物が確認されている。第2次調査では縄文時代中期末の埋設土器の内部から翡翠大珠が出土しており、翡翠の原産地である新潟県の糸魚川流域など、他地域との交流を考えるうえでの貴重な資料が得られた。また、同じ調査の中で犬上郡条里地割に並行する主軸を持つ7世紀後半から8世紀前半にかけての時期の掘立柱建物群が検出されており、当該期の拠点集落であったものと推測されている。

第4次調査においては8世紀代の竪穴建物が検出されており、遺構の埋土中から轆の羽口や碗形の鉄滓、炭化物粒や焼土粒などが出土した。また第5次調査では、縄文時代中期末の焼土坑や竪穴建物、10世紀代の竪穴建物などが検出されている。

従来、丁田遺跡については不明な点が多かったが、近年の民間開発に伴う調査事例の増加によって、縄文時代中期末および奈良時代・平安時代を中心とした各時期にわたる複合遺跡であることが明らかとなってきている。

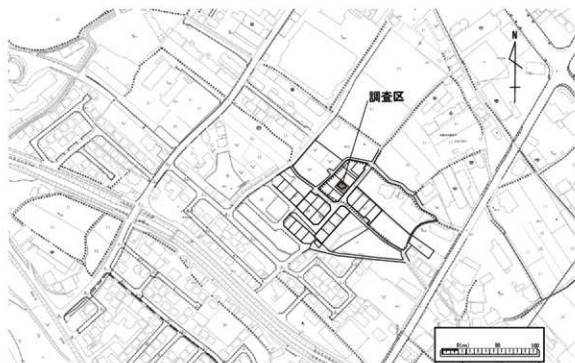


図1 調査地点位置図

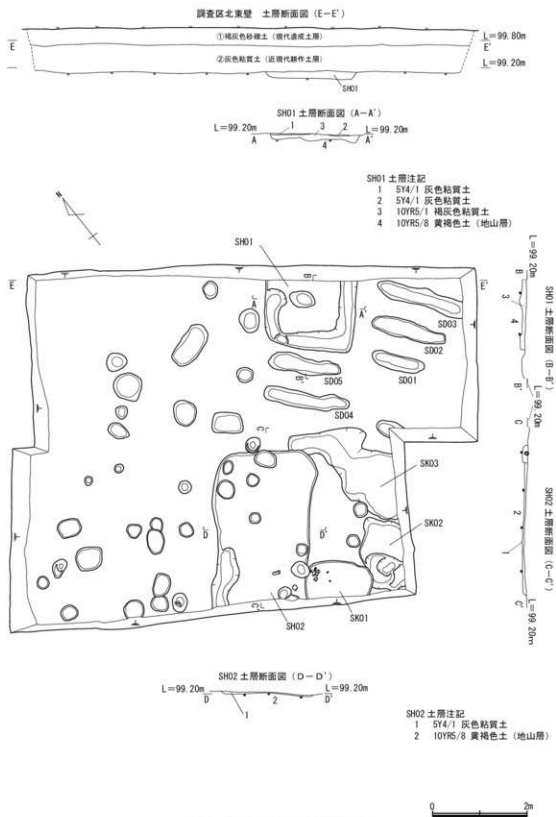


図2 遺構配置図・土層断面図

2 調査経過

今回の発掘調査は、個人住宅建設工事に伴う文化財保護法第93条の届出及び調査依頼に基づくものであり、試掘調査の結果に基づいて、地盤改良工事の影響を受ける建物部分を調査区として、平成27年6月4日から同年6月20日にかけて調査を行った。調査地は、彦根市高宮町字樋ノ詰1650番8に位置する。調査面積は約64㎡である。調査はバックホーにより表土の掘削を行った後に、人力掘削によって遺構の検出および掘削を行った。

3 調査成果

(1) 基本層位

調査区の層序としては、上層から灰褐色砂礫土（現代造成土層）、灰色粘質土（近現代耕作土層）、橙褐色土（基盤層）となっており、橙褐色土（基盤層）の上面において遺構検出を行った。遺構面は、近世～近現代の耕作によって削平を受けているが、現地表面から約90cmの深度において堅穴建物、土坑、溝、小穴等の各遺構を検出した。

(2) 遺構と遺物

調査の結果、遺構としては土坑3基、堅穴建物2棟、溝5条、小穴群などを確認した。遺物については、土坑や溝から須恵器、灰軸陶器などが出土している。以下、主要な遺構について詳細を記述する。

土坑（SK01～03）

SK01は調査区南端に位置し、堅穴建物SH02を切る。平面形状は調査区内において隅丸方形を呈し、長軸約1.4m×短軸約0.75m、深さ約14cmを測る。出土遺物としては須恵器壺（7～9）が出土している。これらはおそらく同一個体と考えられるが、直接的に接合はしない。年代は概ね8世紀代と推定される。

SK02は調査区南端に位置し、SK01に切られる。平面形状は不整形を呈し、長軸約1.6m×短軸約0.9m、深さ約16cmを測る。遺物は出土しておらず、年代は不詳である。

SK03は調査区南端に位置し、SH02に切られる。平面形状は不整形であり、溝状にも見える緩やかな落ち込みとなっている。調査区内においては長軸約2.4m×短軸約1.2m、深さ約9cmを測る。遺物は出土しておらず、年代は不詳である。

堅穴建物（SH01・02）

SH01は調査区北半に位置する堅穴建物である。調査区内において長軸約1.9m×短軸約1.5mを測り、平面形状は隅丸方形を呈するが、短軸側は調査区外へと続いており、全容は不明である。また、建物壁面付近に溝状の掘り込みを有するが、壁溝として捉えるには幅が広く、床面からの掘り込みも浅い。遺物の出土は見られず、年代は不詳である。

SH02は調査区南半に位置する堅穴建物であり、土坑SK01に切られる。平面形状は隅丸長方形を呈し、調査区内においては長軸約3.2m×短軸約1.9mを測る。長軸に対して短軸が極端に短い特徴的な平面プランとなっており、長軸側となる建物西側の壁面付近には溝状の掘り込みを有する。遺物の出土は見られず年代は不詳であるが、7世紀末から8世紀

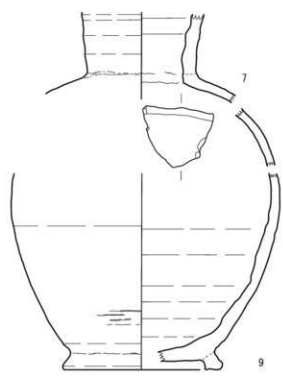
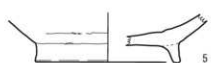
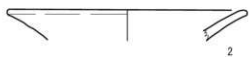


图 3

代にかけての時期と推測される SK01 に切られることから、この時期が下限と推定される。

耕作溝 (SD01～05)

SD01～05 は耕作に伴う鋤溝群である。5 条の溝は概ね同一の主軸を指向し、各溝は幅約 30～40 cm、全長約 1.1～1.9m、深さは約 5～10 cm 程度を測る。この内 SD02 からは灰軸陶器 (1・3)、須恵器坏身 (6) が出土しており、他の溝についてもこれと同時期の遺構と考えられる。

遺構検出面

上記各遺構以外からの遺物として、遺構検出面から灰軸陶器 (2・4・5) が出土した。年代的には SD02 とほぼ同時期のものであり、耕作溝群が形成された時期の耕土中に含まれていたものと推測される。

4 総括

今回の調査では、8 世紀代のものと考えられる堅穴建物 2 棟と土坑 1 基、10 世紀代と推定される耕作溝 5 条、年代不明の不整形な土坑 2 基を検出した。これらのうち堅穴建物 SH02 については、極端に縦長な平面形状を呈し、壁際には溝状のくぼみを有するという点において特徴的であった。もう一方の堅穴建物 SH01 については全体形状が不明であるものの、壁面際の溝状遺構という共通点から、同様の遺構であった可能性がある。

第 4 次調査においては、これに類似する縦長の堅穴建物が検出されており、壁際の溝についても同様の施設を有していた。4 次調査時のこの建物の溝内部からは輪の羽口や鉄片などが出土しており、鍛冶に関連する施設であったと考えている。

今回の 6 次調査で検出した堅穴建物については、こうした鍛冶関連の遺物は出土していない。しかし 4 次調査区とは距離的にも約 50 m と近く、建物構造や主軸についても類似性が高いことから、一連の施設群の一つであった可能性が考えられる。

また、SD02 などの耕作溝や遺構検出時の採集資料として、灰軸陶器が出土しているが、これらについては 8 世紀代に見られた集落域としての機能が失われ、10 世紀代には耕作地としての土地利用が行われていた様子が読み取れる。

近年の調査によって、丁田遺跡では 8 世紀代に鍛冶工房を含む比較的大きな規模の建物群が構築されたのち、以降は徐々に耕作域へと変遷していく様子が明らかとなってきている。居住域としては、10 世紀代にも一部継続しているようであるが、それは 8 世紀代の状況に比べれば、やや小規模なものとなっていたようである。今回の調査では、そうした傾向を改めて追認する成果を得ることが出来た。

参考文献

- 彦根市教育委員会 2011『丁田遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 48 集
- 彦根市教育委員会 2014『丁田遺跡Ⅲ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 57 集
- 彦根市教育委員会 2017『平成 26 年度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 68 集

図版 1



1 調査区南西半部 完掘状況 南東から



2 調査区北東半部 完掘状況 南東から

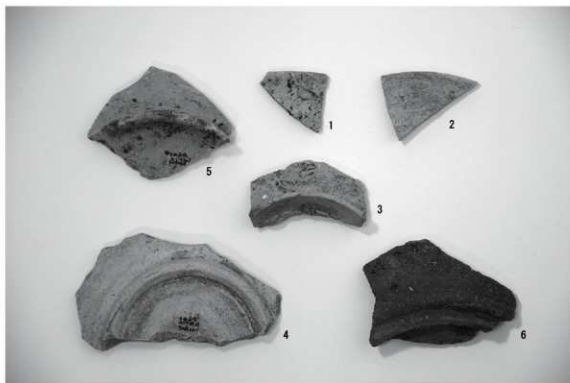


1 SH01 完掘状況 北西から



2 SH02 完掘状況 南西から

図版3



第2章 福満遺跡（第19次）

1 遺跡の概要

福満遺跡は、彦根市西今町・小泉町に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。調査地が所在する西今町一帯は、彦根市北部の犬上川右岸に位置し、周辺には弥生時代終末から古墳時代初頭、古代、中世の集落跡である須川遺跡や、古代寺院・官衙跡として知られる竹ヶ鼻廃寺遺跡などが所在している。

福満遺跡においては、縄文時代前期末および後期・晩期の遺物を含む包含層や、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期の堅穴建物、古代の掘立柱建物などが検出されており、平成25年度には民間の宅地造成工事に伴い実施した福満遺跡第12次発掘調査において6世紀末頃の土壇墓2基が検出されており、一帯に古墳群が存在する可能性が指摘された。

同造成地内では、第13次調査において正南北に軸を持つ8世紀代の大型の掘立柱建物が検出され、第14次調査では古代のものと推測される柵列、第16次調査では、年代は明確ではないが、方形周溝墓の残滓と考えられる溝が検出されている。

今回報告する第19次調査は、これら12～14次、16次調査区と同一の造成地内に位置していることから、弥生時代から古墳時代、古代にかけての遺構や遺物の検出が想定されていた。

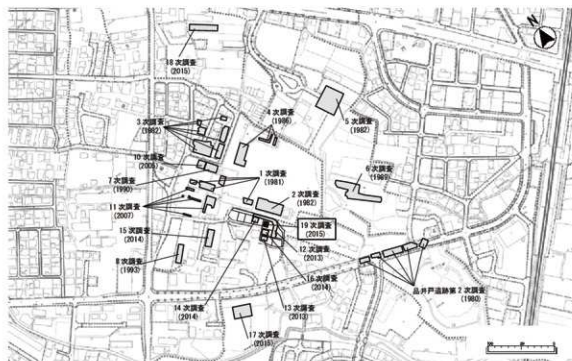


図1 調査地点位置図

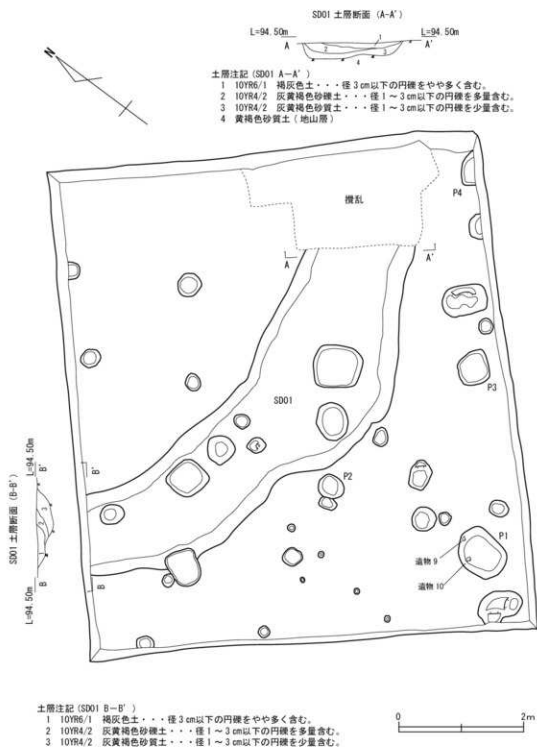


図2 遺構配置図

2 調査経過

今回の発掘調査は、個人住宅建設工事に伴う文化財保護法第93条の届出及び調査依頼に基づくものであり、宅地造成時に実施した試掘調査の結果に基づいて、地盤改良工事の影響を受ける建物部分を調査区として、平成27年12月7日から同年12月17日にかけて調査を行った。調査地は、彦根市西今町字小橋ヶ板298番12号に位置する。調査面積は敷地面積約119.25㎡のうち、建物部分約57㎡である。調査はバックホーにより表土の掘削を行った後に、人力掘削によって遺構の検出および掘削を行った。

3 調査成果

(1) 基本層位

調査区の層序としては、上層から灰褐色砂礫土層（現代造成土層）、灰色粘質土層（近現代耕作土層）、橙褐色土層（基盤層）となっている。このうち橙褐色土層（基盤層）の上面において遺構検出を行ったところ、現地表面～約70cmの深度において溝、小穴等の各遺構を検出した。

(2) 遺構と遺物

調査の結果、遺構としては溝1条、小穴群などを確認した。遺物については、小穴P1およびP2から、土師器、須恵器、砥石などが出土している。以下、主要な遺構について詳細を述べる。

溝 (SD01)

SD01は調査区内において幅約1.1m（最小）～2.2m（最大）、深さ約25cmを測る。平面形状は円弧を描くように構築されるが、遺構の大半は調査区外となっており、全体形状は不明である。遺構内部からの遺物の出土は見られず、構築年代は特定できない。

遺構の埋土は砂質土を主体に径1～3cm程度の円礫を多く含む。堆積状況としては自然堆積によるものと考えられるが、土中に含まれる砂礫の粒径がやや大きいことから、緩やかな流れによるものではなく、洪水等の強い水流により埋没したものと思われる。

小穴 (P1・P2)

P1は長軸約85cm×短軸約65cmを測り、平面形状は隅丸長方形を呈する。遺物としては須恵器坏身(1・9・10)、須恵器坏蓋(7)、土師器(2～6・11・12)、砥石(13)が出土した。砥石は平坦な面については極度に摩耗し、極めて平滑な状態になるまで使用されている。これらの遺物については、全体として概ね7世紀後半から8世紀前半頃のものと考えられる。

P2は長軸約40cm×短軸約35cmを測り、平面形状は不整形を呈する。遺物としては須恵器坏蓋の口縁端部(8)が出土した。年代は概ね7世紀後半から8世紀前半頃と考えられる。

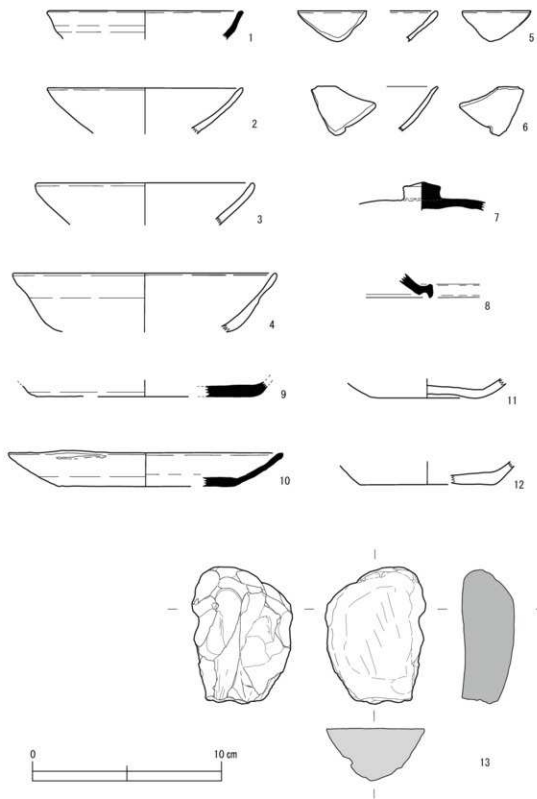


图 3

4 総括

今回の調査では、弧状の溝（SD01）と小穴群を検出した。以下では、近隣での調査成果にも触れつつ、今回検出した各遺構について考察を加えることで、本調査の総括としたい。

SD01については、先述の通り遺物の出土が見られなかったため、構築年代は不明となっている。形態的な特徴としては、平面形が緩やかな弧を描く形となっており、遺構の全体形状を正円と仮定すれば、概ね約 1/5 から 1/6 程度が調査区内において検出されているものと推測される。

隣接する第 12 次調査区においては、今回の SD01 の延長部分と考えられる同様の溝が検出されており、埋土についてもほぼ同質の砂礫を多く含むものであった。この溝が描く弧の中心部からはややずれるために確実ではないが、溝の屈曲の内側では 6 世紀末頃の土壇墓が検出されており、SD01 を周濠として一体を成す円墳であった可能性が考えられる。

小穴群のうち P1 と P2 からは、7 世紀後半から 8 世紀前半頃と考えられる遺物が出土している。他の小穴についても埋土の類似性からほぼ同時期の遺構と推定され、それは 6 世紀末頃の円墳の周濠と推定される SD01 との切り合い関係とも矛盾しない。

こうした状況から、今回検出した遺構は 6 世紀末頃の古墳の周濠と推定される溝、そして 7 世紀後半から 8 世紀前半頃の小穴群という形にまとめられるであろう。13 次調査、16 次調査においても小穴群からは同時期の遺物が出土していること、また 13 次調査においては 8 世紀代の大型の掘立柱建物が検出されていることなどと併せて考えれば、この地点における土地利用の状況としては、古墳時代までは墓域として利用されていたものが、古代には集落、あるいは官衙に準ずるような施設が営まれる区域へと変化していく様子がうかがわれる。

参考文献

- 彦根市教育委員会 2015『福満遺跡第 12 次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 59 集
- 彦根市教育委員会 2015『平成 25 年度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 63 集
- 彦根市教育委員会 2019『平成 26 年度彦根市内遺跡発掘調査報告書 2』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 76 集

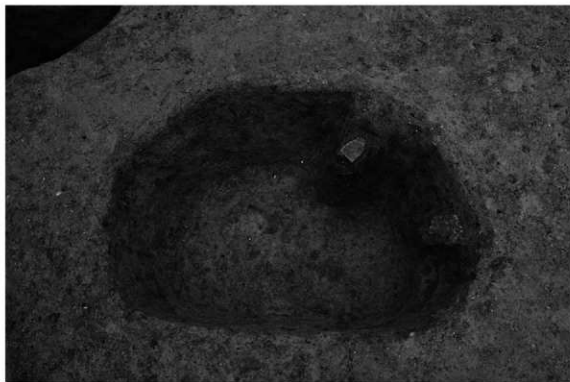
図版 1



1 調査区全景 西から



2 調査区全景 南東から

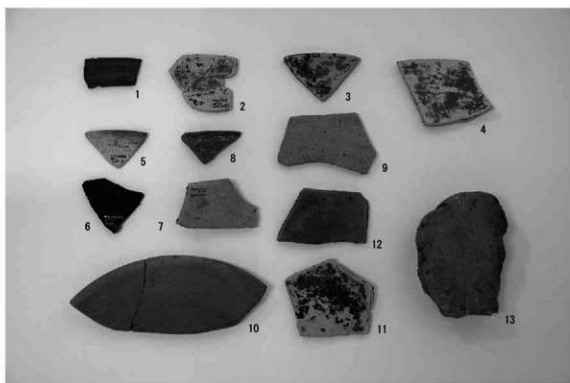
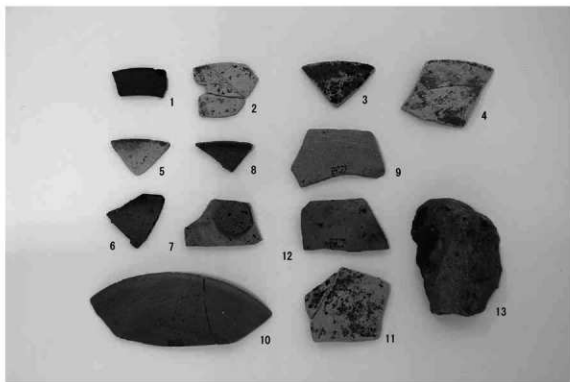


1 P1 遺物出土状況



2 P1 遺物出土状況

图版 3



第3章 須川遺跡（第7次）

1 遺跡の概要

須川遺跡は、犬上川右岸に位置し、周辺では、湧水点が多く存在している。調査地点の遺構検出面の標高は91.7mで、軟弱な粘質土からなる不安定な土質を基盤層としており、犬上川の氾濫原、あるいは後背湿地にあたると考えられる。須川遺跡の東側には、福満遺跡、竹ヶ鼻廃寺遺跡、品井戸遺跡、西今遺跡があり、これらの遺跡は、犬上川右岸の自然堤防上に営まれたもので、その多くは縄文・弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。須川遺跡の近くでは、戦国時代には下街道が、近世には朝鮮人街道が縦貫しており、中世から近世の交通においても重要な位置を占める。今回の調査地は近年の宅地造成工事で整備された宅地の一角であるが、平成27年度には、同宅地の道路部分の発掘調査（第4次調査）が実施されており、複数棟の堅穴建物など弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落関連の遺構が確認されている。

2 調査経過

今回の調査は、個人住宅の建設に伴う文化財保護法第93条の届出及び調査依頼に基づくもので、須川遺跡の第7次調査である。試掘調査の結果に基づき、杭基礎工事によって遺構に影響の及ぶ建物部分を調査区として、平成29年2月22日から3月22日にかけて調査を行った。調査地は、彦根市西今町 地先 に位置する。調査面積は約128㎡である。調査



図1 調査地点位置図

は、表土掘削にはバックホーを用い、その後、人力掘削により行った。

3 調査成果

(1) 基本層位

調査区の基本層序は、第1層：にぶい黄褐色砂礫（現代造成土）、第2層：青灰色粘質土（旧耕作土）、第3層：暗灰黄色粘質土、第4層：灰オリーブ色粘質土（遺構検出面）、第5層：オリーブ灰色粘質土（基盤層）である。遺構検出面の標高は91.7 m前後を測る。

(2) 遺構と遺物

調査区全域で遺構・遺物が検出された。主に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてのもので、堅穴建物、溝、土坑、小穴など集落関連の遺構が確認された。以下に、主要な遺構・遺物について記述する。

遺構検出面で、弥生土器（1～3）と古式土師器（4～13）が出土している。

1・2は弥生土器の壺の口縁部で、口径は1が10.4 cm、2が13.0 cmを測る。3は弥生土器の壺の底部で、底径は4.8 cmを測る。4～8は古式土師器の受口状口縁甕の口縁部で、口径は4が13.6 cm、5が20.6 cm、6が21.4 cm、7が16.2 cm、8が21.2 cmを測る。9～12は古式土師器の甕の口縁部で、口径は9が21.2 cm、10が19.0 cm、11が18.8 cm、12が18.8 cmを測る。13は古式土師器の高坏である。

SX1 調査区の中央付近で検出された落ち込み状の遺構である。調査区端にかかるため全形は確認できない。長辺約2.25 m、残存部の短辺約1.11 m、深さ約0.12 mを測る、埋土はオリーブ黒色粘質土の1層である。

遺物は、弥生土器（14）と須恵器（15）が出土した。

14は弥生土器の甕の口縁部で、口径は7.0 cmを測る。15は須恵器の広口壺の体部である。

SD2 調査区の南東側で検出された溝である。検出できている長さは約1.92 m、幅約0.90 m、深さ約0.33 mを測り、断面は緩やかなV字状を呈す。埋土は暗灰色粘質土の1層である。

遺物は、弥生土器（16）が出土した。

16は弥生土器の壺の口縁部で、口径は17.6 cmを測る。

SD3 調査区の南東端部で検出された溝である。検出できている長さは約2.70 m、幅約0.38 m、深さ約0.22 mを測り、断面は緩やかなV字状を呈す。埋土は暗灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SD4 調査区の北東端部で検出された溝である。検出できている長さは約8.32 m、幅約1.02 m、深さ約0.34 mを測り、断面はU字状を呈す。当該溝の南西隣には並行する畔（SX20）が位置しており、これらは一連の遺構として畦畔を形成していたと考えられる。溝と畦の間には木杭が認められる。この畦畔の時期は、土層断面の切り合い関係より、弥生時代終末から古墳時代初頭の集落関連遺構よりは、後世であることは間違いないが、それ以上の詳細な時期決定は現段階ではできない。

遺物は、弥生土器（17）が出土した。

17は弥生土器の高坏の口縁部で、口径は24.2 cmを測る。

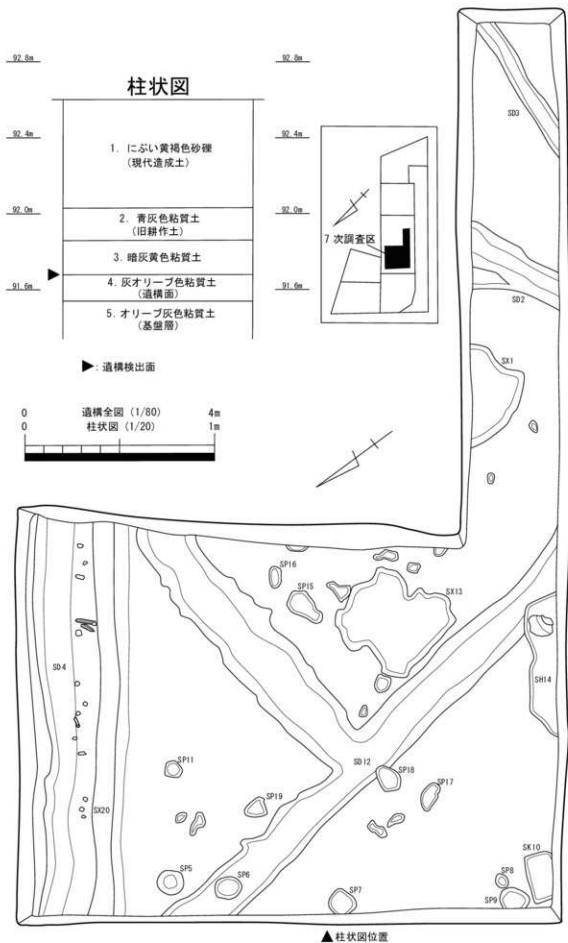


図2 遺構全図・基本層序

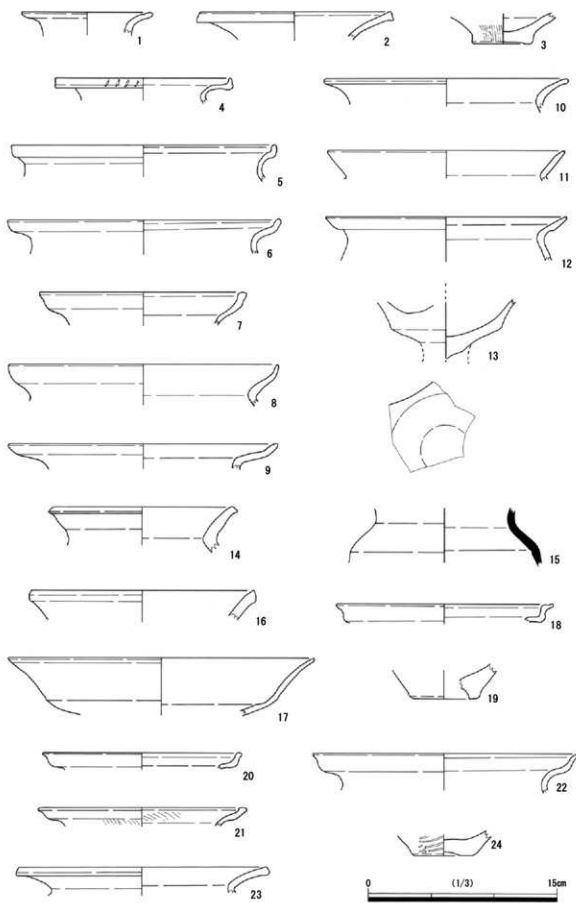


图3 出土遺物実測図(1)

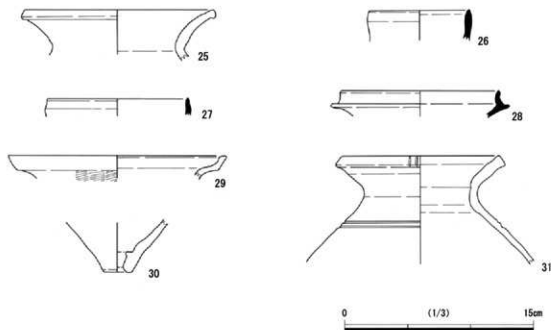


図4 出土遺物実測図(2)

表1 出土遺物一覽

| 発掘 No. | 出土地点 | 種類 | 形状 | 部位 | 発掘層 | 位置 (m) | | 深さ | 出土 | 構成 | 径線 | | | 備考 | |
|-----------|------|------|----|-----|------|------------|------------|------|----|-------|-------|-------|-------|-------|----------------|
| | | | | | | 西径 (長さ) | 東径 (長さ) | | | | 外径 | 内径 | 高さ | | |
| 1 | 溝原地区 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 19.4 | — | 13.6 | 壺 | 中・中層部 | 2.110 | 8.750 | 2.110 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 2 | 溝原地区 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 12.0 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 2.110 | 8.750 | 2.110 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 3 | 溝原地区 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 4.3 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 7.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 4 | 溝原地区 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 12.6 | — | 12.6 | 壺 | 中・中層部 | 2.110 | 8.750 | 2.110 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 5 | 溝原地区 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 26.8 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 6 | 溝原地区 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 21.4 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 2.110 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 7 | 溝原地区 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 16.2 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 2.110 | 8.750 | 2.110 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 8 | 溝原地区 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 21.2 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 7.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 9 | 溝原地区 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 21.2 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 2.110 | 8.750 | 2.110 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 10 | 溝原地区 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 18.1 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 2.110 | 8.750 | 2.110 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 11 | 溝原地区 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 18.8 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 2.110 | 8.750 | 2.110 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 12 | 溝原地区 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 18.8 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 2.110 | 8.750 | 2.110 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 13 | 溝原地区 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 18.1 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 14 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 1.0 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 15 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 1.0 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 16 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 1.0 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 17 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 24.2 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 2.110 | 8.750 | 2.110 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 18 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 17.2 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 19 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | — | 5.6 | — | 壺 | 中・中層部 | 2.110 | 1.750 | 2.110 | 1.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 20 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 13.8 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 21 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 16.4 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 2.110 | 8.750 | 2.110 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 22 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 26.8 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 2.110 | 8.750 | 2.110 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 23 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 18.8 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 24 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | — | 6.6 | — | 壺 | 中・中層部 | 2.110 | 8.750 | 2.110 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 25 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 19.2 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 26 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 8.0 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 27 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 14.6 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 28 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 12.0 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 29 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 17.2 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 30 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | — | 2.0 | — | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |
| 31 | SP9 | 弥生土器 | 壺 | 口縁部 | SP9a | 12.4 | — | 12.0 | 壺 | 中・中層部 | 1.910 | 8.750 | 1.910 | 8.750 | 弥生 遺跡100mの南西寄り |

SP9 調査区の西端部で検出された平面形が楕円形の小穴である。長辺約 0.60 m、短辺約 0.42 m、深さ約 0.11 mを測る。埋土は、暗オリーブ灰色粘質土の1層である。

遺物は、弥生土器(19)が出土した。

19は弥生土器の壺の底部で、底径は5.6 cmを測る。

SP10 調査区の西端部で検出された平面形が隅丸方形の土坑である。長辺約 1.01 m、短辺約 0.54 m、深さ約 0.15 mを測る。埋土は、黒褐色粘質土の1層である。

遺物は、古式土器(18)が出土した。

18は古式土師器のS字状口縁甕で、口径は17.2cmを測る

SD12 調査区の中央より北側で検出された溝である。T字状に伸びている。検出できている長さは約9.44m、幅約1.02m、深さ約0.25mを測り、断面は舟底状を呈す。埋土は、暗緑灰色粘質土の1層である。

遺物は、弥生土器(22・24)と古式土師器(20・21・23)が出土した。

22は弥生土器の甕の口縁部で、口径は20.6cmを測る。24は弥生土器の甕の底部で、底径は4.6cmを測る。20・21は古式土師器の受口状口縁甕の口縁部で、口径は20が15.8cm、21が16.4cmを測る。23は古式土師器の甕の口縁部で、口径は19.6cmを測る。

SX13 調査区の中央付近で検出された平面形は不整形の落ち込み状の遺構である。長辺約2.10m、短辺約1.64m、深さ約0.11m、埋土はオリブ黒色粘質土の1層である。

遺物は、弥生土器(25)と須恵器(26～28)が出土した。

25は弥生土器の壺の口縁部で、口径は15.2cmを測る。26は須恵器の鉢の口縁部で、口径は8.0cmを測る。27・28は須恵器の坏身の口縁部で、口径は27が14.6cm、28が12.4cmを測る。

SH14 調査区の西端部で検出された遺構で堅穴建物と推定される。調査区端にかかるため全形は確認できない。検出部での最大幅は約2.78m、深さ約0.16mを測る、埋土は、黒褐色粘質土の1層である。

遺物は、古式土師器(29・30)が出土した。

29は古式土師器の受口状口縁甕の口縁部で、口径は17.2cmを測る。30は古式土師器の有孔鉢の底部で、底径は2.0cmを測る。

SP15 調査区の中央付近で検出された平面形が楕円形の小穴である。長辺約0.84m、短辺約0.43m、深さ約0.24mを測る。埋土は、暗灰色粘質土の1層である。

遺物は、弥生土器(31)が出土した。

31は弥生土器の壺の口縁部で、口径は12.4cmを測る。

SX20 調査区の北東端部で検出された畦状遺構である。検出できている長さは約8.26m、幅約0.78m、残存高約0.12mを測る。SD4と一体となる畦畔遺構である。

4 総括

今回の調査では、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期の堅穴建物、溝、土坑、小穴など集落関連の遺構が検出された。この調査成果は、隣接地で実施された第4次調査成果とも合致するものであり、調査区周辺一帯に当該期の集落が広がっていたことをあらためて確認することができた。今後は、居住域としての集落の広がりや耕作域の確認などが課題となっていくと考えられるが、それは今後の周辺調査の進展に委ねたい。

参考文献

彦根市教育委員会 2018『須川遺跡第4次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第73集



1 北西調査区全景 [北東より]



2 中央調査区全景 [北東より]

図版 2



1 南東調査区全景〔南東より〕



2 北西壁土層断面〔東より〕



1 南西壁土層断面〔北より〕



2 溝 (SD12) 完掘状況〔南より〕

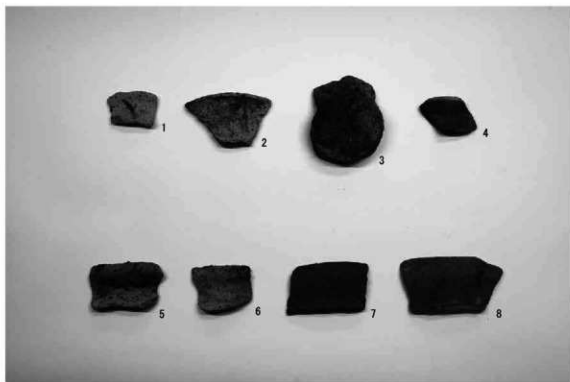
図版 4



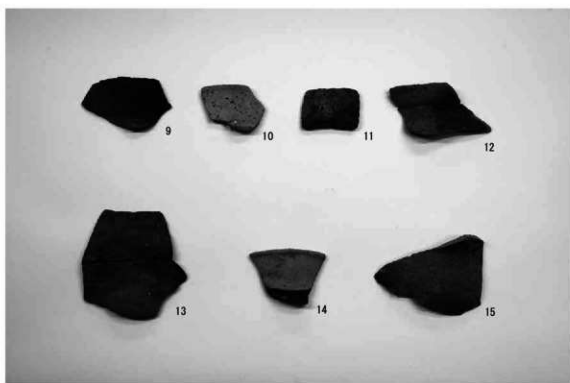
1 竪穴建物 (SH14) 完掘状況 [南東より]



2 畦畔 (SD4・SX20) 完掘状況 [北より]

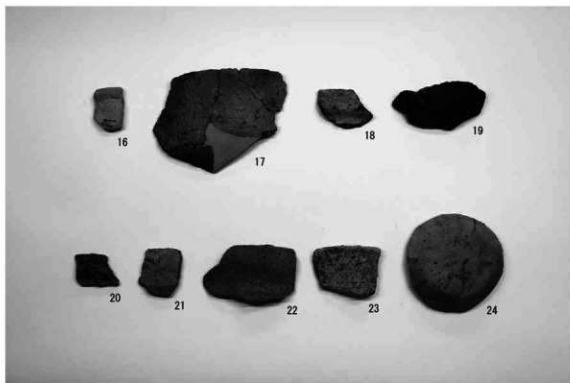


1 出土遺物

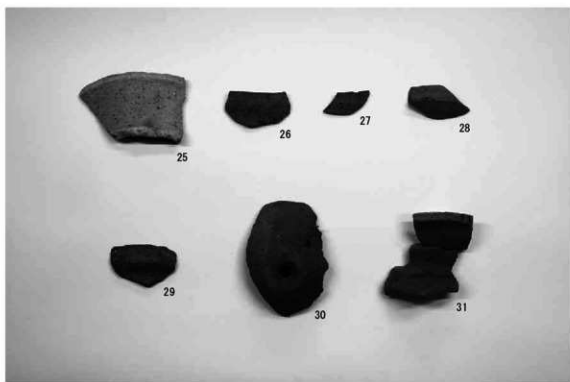


2 出土遺物

図版6



1 出土遺物



2 出土遺物

第4章 須川遺跡（第8次）

1 遺跡の概要

須川遺跡の概要については、本書第3章の第7次調査報告の記述のとおりである。

2 調査経過

今回の調査は、個人住宅の建設に伴う文化財保護法第93条の届出及び調査依頼に基づくもので、須川遺跡の第8次調査である。試掘調査の結果に基づき、杭基礎工事によって遺構に影響の及ぶ建物部分を調査区として、平成29年11月13日から12月7日にかけて調査を行った。調査地は、彦根市西今町地先に位置する。調査面積は約90㎡である。調査は表土掘削にはバックホーを用い、その後、人力掘削により調査を行った。

3 調査成果

(1) 基本層位

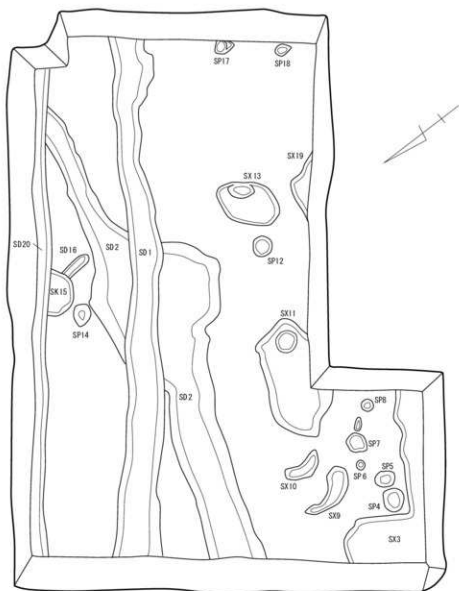
調査区の基本層序は、上層から、第1層：にぶい黄褐色砂礫（現代造成土）、第2層：黄褐色粘質土（旧耕作土）、第3層：暗灰黄色粘質土、第4層：灰オリーブ色粘質土（遺構検出面）である。遺構検出面の標高は91.7m前後を測る。

(2) 遺構と遺物

調査区全域で遺構・遺物が検出された。主に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての



図1 調査地点位置図



▲柱状図位置

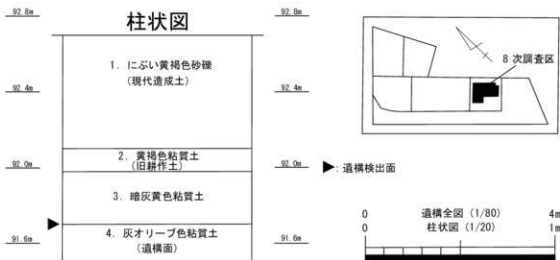


図2 遺構全図・基本層序

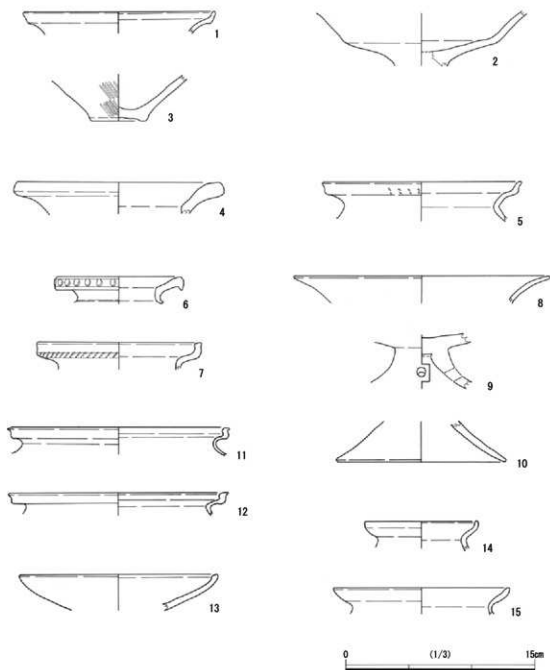


图3 出土器物实测图

表1 出土器物一览表

| 编 号 | 出土地点 | 器 型 | 器 别 | 形 制 | 纹 饰 形 式 | 通 高 (cm) | | | | 胎 土 | 烧 成 | 外 径 | | 备 考 | | |
|-----|-------|-------|-------|-----|---------|------------|-------------|------------|------|-----|------|-----|-----|-----|--------------------|-------------------|
| | | | | | | 口沿 (最大) | 最大径 (最大) | 底径 (最大) | 残高 | | | 外 径 | 内 径 | | | |
| 1 | 凌源城址墓 | 各式土陶器 | 盘 | 口缘折 | SPW607 | 11.0 | — | — | 11.0 | 中 | 中低温烧 | 110 | 110 | 110 | 7.0; 6.5; 4.5; 4.5 | 胎土: 黄褐 1mm以内颗粒多者宜 |
| 2 | 凌源城址墓 | 各式土陶器 | 碗 | 中折 | SPW607 | — | — | — | 18.0 | 中 | 中低温烧 | 110 | 110 | 110 | 8.5; 8.5; 8.5 | 胎土: 黄褐 1mm以内颗粒多者宜 |
| 3 | 凌源城址墓 | 各式土陶器 | 盘 | 中折 | SPW607 | — | — | — | 12.0 | 中 | 中低温烧 | 110 | 110 | 110 | 8.5; 8.5; 8.5 | 胎土: 黄褐 1mm以内颗粒多者宜 |
| 4 | S20 | 下腹 | 各式土陶器 | 口缘折 | SPW607 | 16.0 | — | — | 12.0 | 中 | 中低温烧 | 110 | 110 | 110 | 8.5; 8.5; 8.5 | 胎土: 黄褐 1mm以内颗粒多者宜 |
| 5 | S20 | 各式土陶器 | 盘 | 口缘折 | SPW607 | 13.0 | — | — | 12.0 | 中 | 中低温烧 | 110 | 110 | 110 | 8.5; 8.5; 8.5 | 胎土: 黄褐 1mm以内颗粒多者宜 |
| 6 | S22 | 上腹 | 各式土陶器 | 口缘折 | SPW607 | 9.5 | — | — | 12.0 | 中 | 中低温烧 | 110 | 110 | 110 | 8.5; 8.5; 8.5 | 胎土: 黄褐 1mm以内颗粒多者宜 |
| 7 | S22 | 下腹 | 各式土陶器 | 口缘折 | SPW607 | 12.0 | — | — | 12.0 | 中 | 中低温烧 | 110 | 110 | 110 | 8.5; 8.5; 8.5 | 胎土: 黄褐 1mm以内颗粒多者宜 |
| 8 | S22 | 下腹 | 各式土陶器 | 中折 | SPW607 | 26.0 | — | — | 12.0 | 中 | 中低温烧 | 110 | 110 | 110 | 11.0; 11.0; 11.0 | 胎土: 黄褐 1mm以内颗粒多者宜 |
| 9 | S22 | 下腹 | 各式土陶器 | 中折 | SPW607 | — | — | — | 18.0 | 中 | 中低温烧 | 110 | 110 | 110 | 8.5; 8.5; 8.5 | 胎土: 黄褐 1mm以内颗粒多者宜 |
| 10 | S20 | 下腹 | 各式土陶器 | 口缘折 | SPW607 | — | — | — | 12.0 | 中 | 中低温烧 | 110 | 110 | 110 | 8.5; 8.5; 8.5 | 胎土: 黄褐 1mm以内颗粒多者宜 |
| 11 | S20 | 各式土陶器 | 盘 | 口缘折 | SPW607 | — | — | — | 12.0 | 中 | 中低温烧 | 110 | 110 | 110 | 8.5; 8.5; 8.5 | 胎土: 黄褐 1mm以内颗粒多者宜 |
| 12 | S20 | 各式土陶器 | 盘 | 口缘折 | SPW607 | — | — | — | 12.0 | 中 | 中低温烧 | 110 | 110 | 110 | 8.5; 8.5; 8.5 | 胎土: 黄褐 1mm以内颗粒多者宜 |
| 13 | S20 | 各式土陶器 | 盘 | 口缘折 | SPW607 | — | — | — | 12.0 | 中 | 中低温烧 | 110 | 110 | 110 | 8.5; 8.5; 8.5 | 胎土: 黄褐 1mm以内颗粒多者宜 |
| 14 | S20 | 各式土陶器 | 盘 | 口缘折 | SPW607 | — | — | — | 12.0 | 中 | 中低温烧 | 110 | 110 | 110 | 8.5; 8.5; 8.5 | 胎土: 黄褐 1mm以内颗粒多者宜 |
| 15 | S20 | 各式土陶器 | 盘 | 口缘折 | SPW607 | — | — | — | 12.0 | 中 | 中低温烧 | 110 | 110 | 110 | 8.5; 8.5; 8.5 | 胎土: 黄褐 1mm以内颗粒多者宜 |

もので、溝、土坑、小穴など集落関連遺構が確認された。以下に、主要な遺構・遺物について記述する。

遺構検出面で、弥生土器(3)と古式土師器(1・2)が出土している。

SD1 調査区の北東側で検出された直線溝である。検出できている長さは約10.91 m、幅約0.78 m、深さ約0.14 mを測り、断面は舟底状を呈す。埋土は、暗緑灰色粘質土の1層である。

遺物は、古式土師器(4・5)が出土した。

4は古式土師器の壺の口縁部で、口径は16.0 cmを測る。5は古式土師器の受口状口縁部の口縁部で、口径は15.6 cmを測る。

SD2 調査区の北東側で検出された溝である。検出できている長さは約10.13 m、幅約0.94 m、深さ約0.30 mを測り、断面は舟底状を呈す。埋土は、暗灰色粘質土の1層である。

遺物は、古式土師器(6～10)が出土した。

6は古式土師器の壺の口縁部で、口径は9.6 cmを測る。7は古式土師器の受口状口縁部の口縁部で、口径は12.8 cmを測る。8～10は古式土師器の高坏で、8は口縁部で口径は20.4 cm、10は脚部で底径は13.2 cmを測る。

SX3 調査区の西端部で検出された落ち込み状の遺構である。調査区端にかかるため全形は確認できない。深さ約0.07 mを測る。埋土は、オリーブ黒色粘質土の1層である。

遺物は、古式土師器(11・12)が出土した。

SP4 調査区の西側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.48 m、短辺約0.41 m、深さ約0.12 mを測る。埋土は、暗オリーブ灰色粘質土の1層である。

遺物は、古式土師器(13)が出土した。

SX11 調査区の西側で検出された落ち込み状の遺構である。長辺約2.55 m。短辺約1.34 m、深さ約0.07 mを測る。埋土は、オリーブ黒色粘質土の1層である。南西よりに被熱痕が確認された。遺物は、古式土師器(14・15)が出土した。

4 総括

今回の調査では、弥生時代終末から古墳時代初頃にかけての時期の溝、土坑、小穴など集落関連の遺構が検出された。この調査成果は、隣接地で実施された第4・7次調査成果とも合致するものであり、調査区周辺一帯に当該期の集落が広がっていたことをあらためて確認することができた。今後は、居住域としての集落の広がりや耕作域の確認などが課題となっていくと考えられるが、今回の調査区は南西側の遺構密度が薄く、あるいは集落の縁辺部に近いのかもしれない。これらの課題の解明は、今後の周辺調査の進展に委ねたい。

参考文献

彦根市教育委員会 2018『須川遺跡第4次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第73集



1 西調査区全景〔北東より〕



2 中央調査区全景〔北東より〕

図版 2



1 東調査区全景〔北東より〕



2 北西壁土層断面〔東より〕

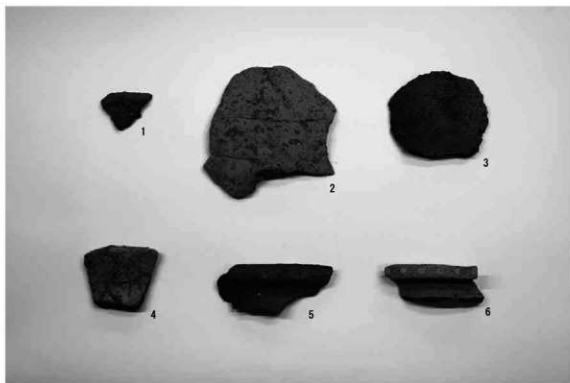


1 溝 (SD1・SD2) 完掘状況 [西より]

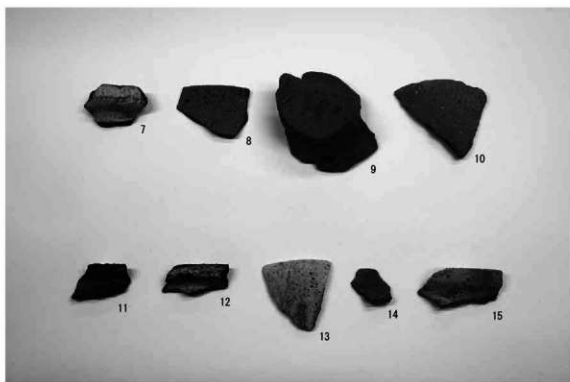


2 SX11 被熱痕検出状況 [北東より]

図版 4



1 出土遺物



2 出土遺物

第5章 須川遺跡（第10次）

1 遺跡の概要

当該調査地は、先述の須川遺跡第7次・8次調査と同じ造成地のため、第7次調査を参照していただきたい。

2 調査経過

今回の調査は、個人住宅の建設に伴う文化財保護法第93条の届出及び調査依頼に基づくもので、須川遺跡の第10次調査である。試掘調査の結果に基づき、柱状改良工事によって遺構に影響の及ぶ建物部分を調査区として、平成31年2月21日から3月28日にかけて調査を行った。調査地は、彦根市西今町に位置する。調査面積は43.00㎡である。調査は表土掘削にはバックホーを用い、その後、人力掘削により調査を行った。



図1 調査地点位置図

3 調査成果

(1) 基本層位

調査地の土層堆積状況は大きく4層に分けることができる。基本層序は、上層から、第1層:にぶい黄褐色砂礫土(現代造成土)、第2層:暗緑灰色粘質土、第3層:灰褐色粘質土、第4層:黄褐色粘質土である。第4層上面で遺構を検出した。

(2) 遺構と遺物

遺構

中世以降のものと思われる幅20cm程度の耕作溝を13条確認した。耕作溝を掘削したのち、遺構面を精査したところ、小穴を複数検出した。

遺物

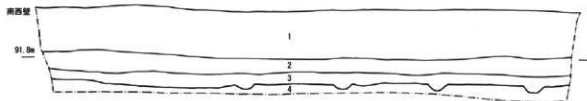
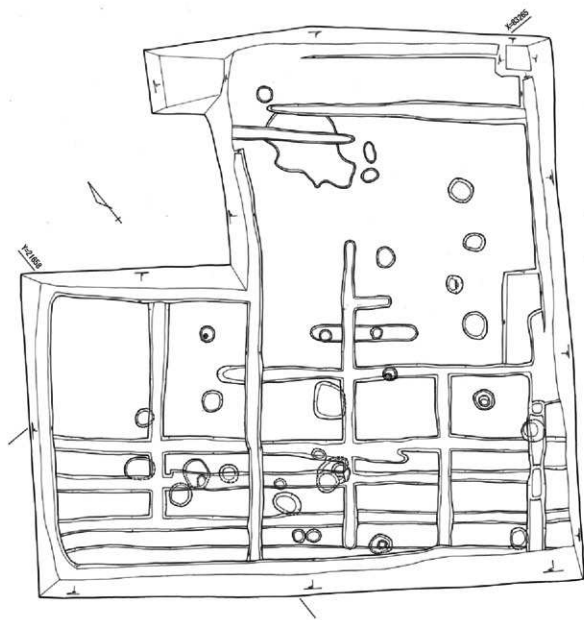
遺構検出面精査中や、小穴中から須恵器片や土師器片が出土しているが、いずれも小片であり図化にはいたらなかった。出土量もコンテナ半分にも満たない。

4 総括

今回の調査では、耕作溝、小穴などの遺構が検出された。今回の調査区は遺構密度が薄く、遺物の出土量も少なかったため今回の調査だけでは遺構の時期や性格の特定は難しい。ただし、4次調査をはじめ先だつて行われた近隣の調査の結果から推察すると弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期の集落の一部である可能性が高い。遺構密度の低さから集落域の辺縁部に位置すると考えられるが、詳細な集落域の広がり確認等は、今後の周辺調査の進展に委ねたい。

参考文献

彦根市教育委員会 2018『須川遺跡第4次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第73集



土色

1. にぶい黄褐色砂礫土 10YR5/4 現代造成土
2. 暗緑灰粘質土 5G3/1
3. 灰褐色粘質土 7.5YR4/2
4. 黄褐色粘質土 2.5YR5/6

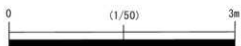


図2 遺構配置図・土層断面図



1 調査区全景 (南西から)



3 遺構検出状況 (北東から)



2 調査区南西壁断面 (北東から)



4 遺構検出状況 (南から)

報 告 書 抄 録

| ふりがな | ひこねしないいせきはつくつちょうさほうこくしょ | | | | | | | |
|---------------------------|--------------------------------------|-----------------------|-------------------------|-------------------|--------------------|------|---------------------------|------|
| 書名 | 彦根市内遺跡発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 彦根市埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第89集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 田中良輔、内藤京、林昭男 | | | | | | | |
| 編集機関 | 彦根市歴史まちづくり部文化財課 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒522-8501 彦根市元町4番2号 TEL 0749-26-5833 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 20230331 | | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | | 世界測地系 | | 調査面積 | 調査期間 | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | | | |
| ちのどいせき 丁田遺跡 (第6次) | ひこねし 彦根市 たかみやの 高宮町 | 25202 | 139 | 35度 14分 24秒 | 136度 15分 11秒 | 64㎡ | 20150604 ～ 20150620 | 個人住宅 |
| ふくみづいせき 福満遺跡 (第19次) | ひこねし 彦根市 にしきょう 西今町 | 25202 | 052 | 35度 14分 50秒 | 136度 14分 36秒 | 57㎡ | 20151207 ～ 20151217 | 個人住宅 |
| すのういせき 須川遺跡 (第7次) | ひこねし 彦根市 にしきょう 西今町 | 25202 | 018 | 35度 14分 56秒 | 136度 14分 17秒 | 128㎡ | 20170222 ～ 20170322 | 個人住宅 |
| すのういせき 須川遺跡 (第8次) | ひこねし 彦根市 にしきょう 西今町 | 25202 | 018 | 35度 14分 56秒 | 136度 14分 17秒 | 90㎡ | 20171113 ～ 20171207 | 個人住宅 |
| すのういせき 須川遺跡 (第10次) | ひこねし 彦根市 にしきょう 西今町 | 25202 | 018 | 35度 14分 57秒 | 136度 14分 16秒 | 43㎡ | 20190221 ～ 20190328 | 個人住宅 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構・遺物 | | | 特記事項 | | |
| 丁田遺跡 (第6次) | 集落 | 奈良時代、 平安時代 | 堅穴建物・小穴・耕作溝 須恵器・灰釉陶器 | | | | | |
| 福満遺跡 (第19次) | 集落 | 古墳時代、 奈良時代 | 溝・小穴 須恵器・土師器・砥石 | | | | | |
| 須川遺跡 (第7次) | 集落 | 弥生時代終 末～古墳時 代初頭 | 溝・土坑・小穴、 古式土師器 | | | | | |
| 須川遺跡 (第8次) | 集落 | 弥生時代終 末～古墳時 代初頭 | 溝・土坑・小穴、 古式土師器 | | | | | |
| 須川遺跡 (第10次) | 集落 | 弥生時代終 末～古墳時 代初頭 | 土坑・小穴、須恵器・ 土師器 | | | | | |

彦根市埋蔵文化財調査報告書第89集
彦根市内遺跡発掘調査報告書

令和5年(2023年)3月31日発行行

編集・発行：彦根市歴史まちづくり部文化財課
彦根市元町4番2号
TEL. 0749-26-5833

印刷・製本：株式会社デジ・プリント滋賀
滋賀県彦根市平田町776-1

HIKONE CITY EXCAVATION REPORT

CHODA SITE 6th

FUKUMITSU SITE 19th

SUGAWA SITE 7th and 8th and 10th

2023